



村での活動について話し合いをするチーム9のメンバー(インドネシア・西部バリ国立公園)

あいあいネットのこれから	2
活動レポート	
◆西部バリ国立公園プロジェクト	4
特集・海の向こうの仲間たち	
◆西バリ: チーム9メンバーインタビュー	6
◆いりあい交流: トンプ村での聞き書き	8
◆JICA研修: 研修員からのメッセージ	10
コラム	
◆事務局短信	11
◆オススメ地域	12

2011.6

Vol. 2



いりあい・よりあい通信

一般社団法人あいあいネット(いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク)

あいあいネットのメンバーは日本と世界の様々な所で活動し、日本と海外を行ったり来たり。一見バラバラでまとまりのないような私達をつなぐ1本の糸が、「いりあい・よりあい・まなびあい」です。あいあいネットの活動やそこに関わる人々の思いを、いりあい・よりあいの糸で綴じ、皆さまにお届けします。

川崎での新たなスタート!

2011年4月、あいあいネットは事務所を神奈川県川崎市多摩区に移転しました。都心からは離れますが、新宿から小田急線急行で20分と、東京からの便も良い場所です。今までご協力頂いた皆様との縁も大切にしながら、新しい地での活動をスタートさせたいと思っていますので、これからもどうぞよろしくお願いします。



あいあいネット新事務所

これからの主なスケジュール(2011年6~10月)

- 6月 「住民主体のコミュニティ開発A」研修受入(6/21-7/15)
- 7月 「持続的農村開発」研修協力(7/27-28)
インドネシア・西バリプロジェクト、現地研修(7月末)
- 8月 生田緑地サマーミュージアム出店(8/7)
JICA横浜ギャラリー展示(7/23-8/17)
ベトナム研修受入(予定)(8/16-9/2)
- 9月 あいあいネット総会・西バリ活動報告会(9/4)
「ウガンダ北部地域行政官能力向上」研修受入(9/26-10/22)
- 10月 あいあいネット勉強会(予定)(10月末~11月上旬)



多摩川から対岸の東京を望む

「まなびあい」の深化を目指して

～大震災と事務所移転を機に考えること～

長畑誠（あいあいネット専務理事）

まなびあいは創出してきた・・・が？

「私が小さかった時、夕食が終わると子どもたちはおばあちゃんのそばへ集まり、昔の村で起きた出来事や、山に住む恐ろしい生き物の話を聴かせてもらうのが楽しみだったものです。でもいま子どもたちは、夕食後すぐにテレビにかじりつき、都会が舞台のドラマに見入っています」「昔は結婚式という、近所中の人たちが集まり、宴席のお手伝いをしながら共に祝ったものです。今は結婚式場を借り、すべて業者にお任せして、近所の人たちは招待状が来ないと参加してくれません」「以前は村の道が壊れたら、集落総出で直すのが普通でした。今は行政がやってくれるものと思い、誰も何もしようとしません」……これらの発言、実は日本人のものではなく、私が教員をしている大学院の留学生たちの言葉です。最初の発言は東アフリカ・タンザニア、次は中米・エルサルバドル、そして最後の発言は南アジア・バングラデシュから。

まさにいま、「地球は一つ」になりつつあります。社会の近代化は世界の隅々まで行き渡り、人々の暮らしが世界各地で大きく変質し、どこも同じような生活様式が席卷しつつあるようです。そのため世界の各地域に住む人々は似通った課題に直面し、それに対する解決方法も共通する点があるのではな

いか。こうした現状認識に基づいて、私たちあいあいネットは、「地域づくりに携わる人々が国境を越えてまなびあう」ことを柱の一つとして活動してきました。そして日本の地域づくりの現場で生まれた手法がいわゆる「途上国」の現場でも役立ち、インドネシアで培われた技法がベトナムでも役立つ、というような経験を積み重ねてきました。たとえば「地元学」「ファシリテーションの原理と技術」「映像や聞き書きといった記録の持つ力」「NPOや住民組織と行政との協働手法」等々、国境を越えた実践現場同士のまなびあいが生まれています。

けれども、何かが足りない。次の展開のためには、何かが不足している。私にはそんな漠然とした思いがありました。

東日本大震災が問いかけていること

東北地方太平洋岸を中心に未曾有の大損害をもたらした東日本大震災。死者・行方不明者2万4千人超、全半壊家屋11万戸以上、津波による浸水507平方キロ（大阪市の2.3倍）という被害の大きさだけでなく、この大震災は日本の社会のあり方そのものに問いを突きつけているように思えます。家も道路も田畑も港も、根こそぎ破壊されてしまった後、どのような暮らしと生計の復興の姿を描くのか。役場の機能が麻痺状態の中で、行政と住民組織とNPOとはどう役割を分担していくのか。避難生活が長引く中で、地域コミュニティの絆や助け合いはどうなっていくのか。津波、或いは原発事故によって、その土地で暮らしてきた歴史や記憶が奪われてしまう危機に、どう対処するのか。そして何よりも、原発事故は、地震・津波の直接の被災地だけでなく、原発の電気を使って暮らし、先進的な科学技術やそれを扱う専門家に大きく依存している私たちの生活そのものを問いかけています。



国境を越えたまなびあい
—地域の人の話に耳を傾けるJICAの研修員（熊本県）

こうした事態の中で、あいあいネットが唱える「国境を越えたまなびあい」はどのような力を持てるのでしょうか。私は、「地域づくりの中身」についてもっと深く考えていく必要があると感じています。あいあいネットがこれまで紡いできた「まなびあい」は、「地元学」や「ファシリテーション」「協働の方法」といった、主に地域づくりの「手法」に関するものでした。これらも勿論、震災からの復興の過程で重要な考えです。でも今、より強く求められているのは、「どのように」ではなく、「どんな」地域を作っていくのか、ということではないのでしょうか。自然と人間、人間同士、都市と農村、行政と民間、といった様々な関係性が問われている大震災・原発事故以降の世界では、私たちの暮らし方や社会のあり方自体を考え直し、作り直す必要があるでしょう。そしてそのことが、今後私たちが日本の地域と世界の地域をつないでいく一つの重要な中身になっていくと思うのです。

事務所移転を機に～地域の人々と普通の言葉で繋がる～

大震災から数週間後、4月初めにあいあいネット事務所は東京都新宿区高田馬場から、神奈川県川崎市多摩区東生田に移転しました。これから、地域で活

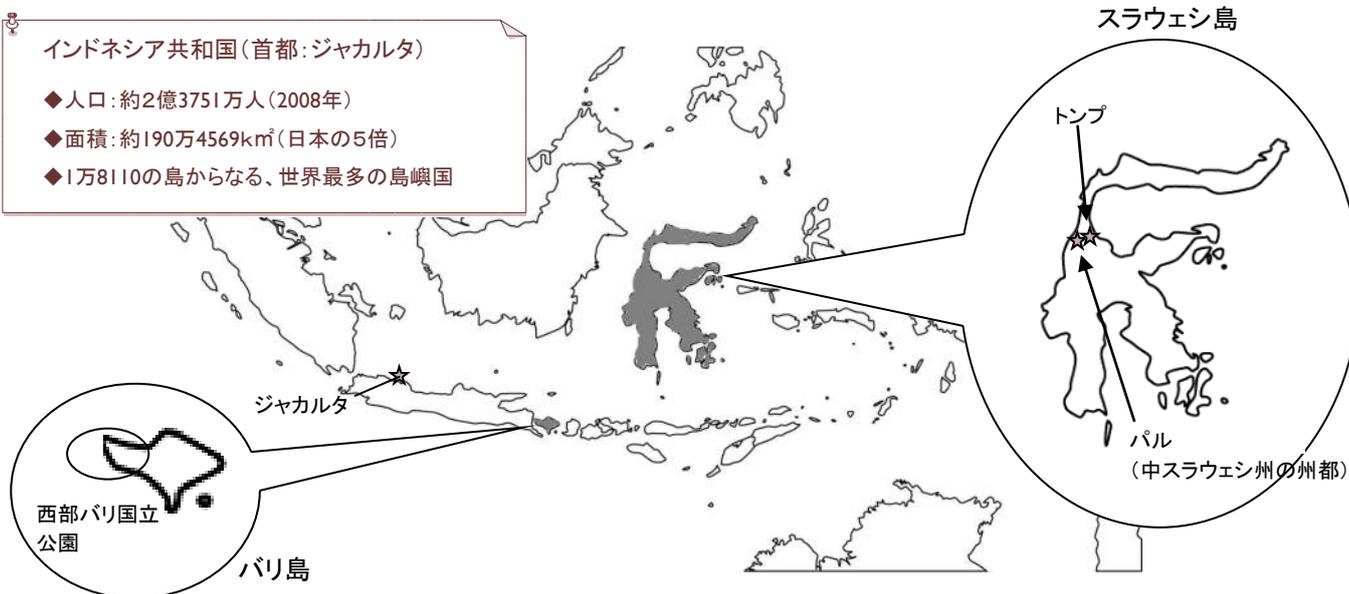
動するNPOや市民グループ、行政の方々と少しずつ関係を作り始めます。その過程で、いま地域はどんな課題に直面し、どのように乗り越え、いかなる社会を作ろうとしているのか、より詳しく見えてくるでしょう。それを世界に発信し、各地で地域づくりに取り組む人々をつないでいきたい、と思います。と同時に、私たちが世界の各地で実践する人々と出会うことで見えてきた、新しい暮らしや生計の形、「自然と人間」「人間と人間」の関係のあり方などについて、日本の地域で活動する人々に伝わる言葉でつないでいく、ということも目指していきたいです。

日本社会が大きく変わることを余儀なくされている時代、私たちも「語るべき言葉」と「つなぐべき中身」をより洗練させていく時期に来ていると思います。



東生田周辺の町並み

あいあいネットの主なプロジェクト地





カンムリシロムク翔び交う、美しい村へ再び

～チーム9 with スンブル克蘭ポック村のおじちゃん・おばちゃんの挑戦～

山田 理恵 (あいあいネット理事)

2008年5月から始まった「西部バリ国立公園プロジェクト」(国立公園と周辺コミュニティとの協働関係づくり)の活動も早いもので3年。インドネシアのNGO仲間の協力を得て、国立公園現場職員であるチーム9のメンバーにファシリテーターとしてのスキルや考え方を身につけてもらうため、じみ～に研修を続けてきました。その甲斐あって、「村に行っても、オレたち何やればいいのかわからん!うまく話もできないよー」と悩んでいたメンバー達も今では意気揚々と村に通い、村のおじちゃん・おばちゃんに可愛がられ、頼りにされる存在に。そして、村の人たち自身が「自分たちがやりたい自分たちの村づくり」のために動き出しました。

周辺村との協働関係づくりを図るため、あいあいネットの活動対象地域として国立公園が当初指定したのはプジャラカン村とプリンビンサリ村の2村でしたが、森の生態系から見ると国立公園地域の中にすっぽり入っている、スンブル克蘭ポック村への働きかけも2010年から始まりました。今回は、スンブル克蘭ポック村でのチーム9の活動をご報告します。

西部バリ国立公園は、2003年から横浜市と協働して、絶滅の危機に瀕したバリ島固有のムクドリ、カンムリシロムクの保護活動に係る様々な取り組みを行っていますが、シロムクの個体数を増やすためには、生息地の整備が必要だし、公園だけでなく一般の住民の人たちも巻き込んで繁殖活動をしていくことも効果があるのではないかと、いう機運が高まってきました。国立公園の第2地域管理事務所があるスンブル克蘭ポック村。チームのメンバー達が村のおじちゃん・おばちゃんとフツーの会話ができるようになってきて、話を聴いてみたら、出てくる出てくる・・・シロムクにまつわる昔の話。「オラがちっちゃかったころにはな、父ちゃんが飼ってる牛の身体の上にシロムクがしょっちゅういた。牛の糞にたかっているハエを食べてたんだよな。」「あたしゃ、あの木にシロムクがたっくさんとまってるのをよく見てたよ。」とか、ついには「シロムクの肉は鶏と比べるとちよつと苦えんだわ・・・」え、、、。おじちゃん・おばちゃんは口々に、昔はよかった。村

にはシロムクが翔び交っていた。それはそれは美しかった・・・と、話してくれました。そして、おじちゃんたちは、自分たちの力でカンムリシロムクを増やしてあげたいなあ、というようになりました。

それから、村人によるカンムリシロムク人工繁殖実現に向けて、チーム9のファシリテーターとしての体当たりの日々が始まりました。

これまでの活動は、以下のような流れで進んできています。

- ◆ 2010年7月17日、村役場の集会場に30名の村人が集まり、住民によるカンムリシロムクの人工繁殖が可能になった(合法化された)という情報を共有
- ◆ 観察やインタビューによる村の基本情報収集
- ◆ 地元NGOのSEKAとの話し合い(住民主体のカンムリシロムク人工繁殖に関する現場での活動について共通理解を図る)

◆ 村役場を訪問

村人たちは、カンムリシロムクの人工繁殖について技術的な不安も抱えていて、研修を受けたいと考えていることがわかった。このことについて村役場側と協議し、日時、場所、誰が研修に参加するか等、研修の実施に係る様々なことが村役場と村人のイニシアティブによって決められた。



村役場での人工繁殖研修

◆ カンムリシロムク人工繁殖研修をファシリテーション

18人の参加者が集まり、村役場集会所で研修が実施された。村での研修は11月25日から27日の2日間、翌28日には村人と共にギャニャール県に赴き、カンムリシロムク人工繁殖に成功した個人繁殖家の現場を視察。

◆ 研修参加者フォローアップ

村人たちは研修に参加して、カンムリシロムクの人工繁殖が自分たちにも技術的に可能である、という見解をもてるようになったことを確認。



ギャニャール県の個人繁殖家の話を聞く「マヌク・ジェゲグ」のメンバー

◆ 村人との会合

カンムリシロムクの親鳥の確保は、村人の経済力に応じた担保により保護協会から借り受けることとした。また、飼育ケージの製作計画や繁殖家と村役場間の規定・契約に係る取り決め等について話し合った。

◆ 繁殖家グループの結成

グループ名は、バリ語で「美しい鳥」の意味の「マヌク・ジェゲグ」となった。ケージの製作、身近な幼鳥を使った、飼育練習、許可申請書の記入などの活動をする村人たちに寄り添う支援を行った。

その後、自然資源保全事務所の訪問指導によりマヌク・ジェゲグのメンバーは全員、人工繁殖を行う条件を満たしていると認められ、カンムリシロムク人工繁殖許可申請書の提出をすることができました。4月半ばにカンムリシロムクの交配、雛の扱い方、病気の管理、捕食動物等についての研修が村で行われ、4月下旬には、繁殖家候補のおじちゃんたちはそれぞれの伴侶も連れて（なんだかんだ言っても、頑張るのはやっぱりおばちゃんなんです）チーム9と共に、ジョグジャカルタとガンジュック（東ジャワ州）の個人繁殖家のもとを訪れました。特にガンジュックでは、フツーのおばちゃん、スシロワティさんによるシロムクの人工繁殖を視察。スシロワティさんは太っ腹でシロムクをこよなく愛する女性。シロムクが西バりに里帰りして、再び大空を舞い飛ぶのを見たいわ！と、マヌク・ジェゲグにシロムクを一つがい寄付することを約束、スンブル克蘭ボック村のおじちゃん・おばちゃんのこれからの活動に一肌脱いでくれることになったそうです。

「誰かに頼って何かができるんじゃなくて、できるかどうかは、オラ達自身にかかっているんだね。」とマヌク・ジェゲグのメンバーがつぶやいたのを聞いて、スギちゃん(※)はファシリテーターとして感無量だったとか・・・。

スンブル克蘭ボック村でのチーム9の活動はまだまだ続きます。お楽しみに。



ジョグジャカルタの個人繁殖家を皆で訪問

※チーム9のリーダー、スギアルトさんのこと。

村の頼れるパートナーになることを目指して

～チーム9メンバー・ングラさんインタビュー～

西部バリ国立公園であいあいネットが活動を始めて3年。これは、チーム9のメンバーが新たな事に挑戦し続けている月日でもあります。彼らはまだ歩みを進めている途中ですが、ここまでの活動について、メンバーの一人であるングラさんに聞いてみました。



イ・グスティ・スランガナ（通称：ングラ）
バリ島シンガラジャ出身。1985年から西部バリ国立公園で働いている。チームの活動では主に、スンプルクランボック村を担当している。

ーングラさんは、普段どんな仕事をしていますか？

森林生態系管理官として勤務しています。国立公園内のパトロールは、森林警護官が行います。森林生態系管理官は、動植物のリストアップ、観察・管理、識別などが主な業務です。

ーチーム9の活動としては、どんなことを？

森の周辺に暮らしている人々が森の自然を壊してしまったり、課題を抱えていることがあります。動植物の生息地である森を守ることだけでなく、その周りに暮らす人々に寄り添う活動を、チームの仲間たちと行っています。

ーあいあいネットの研修に初めて参加した時の印象は？

何しろ最初は「混乱」しました。みんなとても混乱していましたよ（笑）。あいあいネットの人たちがどんな目的で私たちと活動しようとしているのかわかってくると、徐々に頭がクリアになってきました。私たちは村の人たちに寄り添い、友達になって、あるもの探しをしていく。実は彼らには潜在的な可能性がありますから。1年半ぐらい経ってからでしょうか、実際に村に入っていく中でそれがわかってきたんです。

ー研修が始まってチームメンバーと初めて村に行った時、何をしたか覚えていますか？

とにかく村を歩きました。そして、見たものや聞いたことを何でも書き留めていきました。村にある事実を分析して、仮説を立てるんです。でも、まさにこれが当惑したことでした。いったいこれが何につながるんだろう、何をするんだろう、って。



村を歩いて、村にあるものを探す

ー以前村に行ったときと何か違いはありますか？

以前は村に行っても、村の人に会いにいたりしませんでした。村役場に行って、情報収集をするとか、村長さんに何が必要かを訊く（笑）・・・そんなことをしてましたね。でも、今は違います。村の人たちとたくさん話しをします。村に何があるのか、彼らはよくわかっています。だから、今は村に行って友達探しをしていますね。

ーなるほど。村の人と友達になったんですね。ングラさんの日常の仕事にも何か変化がありましたか？

実は・・・以前は村人は賢くない、と思っていました。でも、今は違います。地元の知恵は素晴らしくて、私たちがどんな取り組みをすればいいか、村の人たちのやり方から学ぶことが多いです。また、私たちだけが何かをするのではなくて、村の人たちと一緒にやるんです。私は、森を守るのが仕事ですから、村の人を誘って、一緒に森を守っていきたいです。私たち国立公園と村の人たちが共通の課題をもち、それを解決していくことが必要ですよ。例えば、スンプルクランボック村ならカンムリシロムクの保護・繁殖です。村の人たちはカンムリシロムクを守ることによって自分たちも繁栄する事ができますから、国立公園と共通の課題に対峙するわけです。

ーあいあいネットとの活動で面白い事は何ですか？

以前の私たちにとって、村の人たちというのは森を荒らす根源でしたが、今は全然違います。村の人たちは私たちの友達です。彼らをご飯を食べたいのなら、彼らをご飯を食べられるようにしたい。だから、「村にあるもの」を探すんです。どんな可能性があるのかを。外から援助を持ち込むのではなくて、彼らの持つ可能性を彼らが開発できるように、考えてもらえるように仕掛ける。

一緒に考えて、一緒に掘り起こしていきます。そのためにデータを集めたり、インタビューをしたり・・・これだ！というものが見つかるまで。

ーチーム9の他のメンバーとこのことについて話したことがありますか？

たぶん、他のメンバーたちも同じだと思いますよ。今は、私と同じように村の人を見ているでしょう。

ー言葉を交わさなくても分かるんですね。すごい。

もちろん、昨年12月から毎週木曜日にメンバーの自宅でミーティングをしていますし、しょっちゅう話もします。それぞれの担当の村での動きがあれば、共有しています。それが、チームの次のアクションプランにつながるんです。メンバーがお互いにまなびあいます。村の人と一緒に作ったアクションプランの活動で何か問題が生じれば、時間のあるメンバーが村に行って対処します。

これまでの研修で、パートナーシップづくり、コミュニティに根差した課題分析、アクションプラン策定、活動の実践、モニタリング・評価を学んだことで、それぞれの村の課題を分析することができるようになりました。ギリマヌック村、エカサリ村、ムラヤ村ではまだ活動をしていませんが、今後、同様の方法でやれると思います。

ー村の人から言われた事で覚えている事はありますか？

村の人以前は私たちのことを疑っていたと思います。でも一緒に活動をするようになってからは、こんちは！と気軽に挨拶を交わせるようになりました。彼ら



あいあいネットとの研修

が抱えている問題を私たちに正直に話してくれ、コミュニケーションを求めてくれます。相談に乗ってほしいと頻繁に言われるようになりましたよ。手紙をもらうこともあります。

ー最後の質問ですが・・・今年はチーム9として、村の人たちとどんなことがしたいですか？

スンプルクランポック村では、カンムリシロムクの人工繁殖に取り組み始めています。カンムリシロムクの繁殖を成功させることで、村の人たちの生計向上を図ることができればと思っています。そのために私たちチームは村の人とコミュニケーションをし、モニタリングを行い、村の人たちが自立できるまで寄り添っていく。そうすることで、村の人たちの経済が上向くだけでなく、カンムリシロムクの生息地を整備していくことができるでしょう。

聞き手：高田尚子（あいあいネット事務局）



国立公園のチャトウール課長にもインタビュー (第一地域管理課)

ーチャトウール課長はどんなお仕事をされているのですか？

部下である森林生態系管理官や森林警護官の仕事を監督する役割を負っています。

ー国立公園はどんな必要性があって、チーム9の活動を始めたのですか？

以前国立公園で行っていたコミュニティ・エンパワメント活動の構造は、“上から下へ”という形で、成功しませんでした。それがチーム9が活動を始めて、基本的には全て“下から上、コミュニティから国立公園へ”という形に変わりました。チーム9の「コミュニティのために、コミュニティから」というコンセプトはとても素晴らしいと思います。

ーチーム9を始める前は、どういったコミュニティ・エンパワメントの活動を実施していたのですか？

例えば以前、国立公園からコミュニティの人々に牛をあげたことがありました。けれども実際は、人々は牛は欲しくなかったのです。以前の森林生態系管理官は、村の実情を調査をしたり村の人と話をしたりすることもなかったし、自分たちが行ったことがその後、人々や国立公園にとってどんなインパクトがあるのか、調べた事もなかった。前はただただ、あげて、あげて、あげるだけ。コミュニティの人々はそれをもって、もらって、もらって、もらう。そんな関係でした。

ーチーム9には今後、どんな事を期待していますか？

私はチーム9がこの国立公園にあることを幸せに思っています。将来的には、チーム9のメンバーがコミュニティ・エンパワメント活動のリーダーになって、他の森林生態系管理官も一緒になって活動できればいいなと思っています。私は彼らならリーダーとなって活躍できると信じています。

山登りから山の村へ

ただいま、トンブ村、聞き書き中!



ルンです。よろしく!

シャハルン・ラジュッパ(通称ルン)

1979年、中スラウェシ州パル市生まれ。市内の高校卒業後、NGOアワム・グリーンに関わる。2006年6月、「いりあい交流」訪日メンバーの一人として来日し、18日間、福島、山形、滋賀の山村を訪ね歩いた。以来、あいあいネットの頼りになる仲間の一人。

いりあい交流

あいあいネットの活動の柱の一つ。「いりあい(ムラにねざした資源の共同管理)」をキーワードとして、日本とインドネシアの山村の経験をつなぎ、学びあう試みとして、2004年以來、実施している。

2006年6月には、インドネシアから、NGO、村人、地元政府職員、大学教員計6名を招き、福島・山形・滋賀の山村を訪ね歩いた。

2008年からは、インドネシアでの交流の拠点の一つとなったトンブ村で、映像記録と聞き書きを通じて、人と森のつながりを学びあう活動を展開中。



マレナ村の子供たちと(2007年2月)

「僕の名前はルン。英語読みしたら、Run(走る)。走ってるうちに勢い余って日本まで来ちゃいました。」

2006年6月、「いりあい交流」の一環で来日した際、お茶目な自己紹介で場を和ませていたルン。2008年から、インドネシア・スラウェシ島のトンブ村で実施している映像記録作業でも中心的な役割を果たしています。

困っている人がいるとじっとしてられず、体を壊すほど走り回ってしまうルン。そんなルンに、山村に関わるようになったきっかけ、「いりあい交流」を通して気づいたこと、感じたことなどを聞きました。

◆「いりあい交流」に関わるようになったきっかけは?

日本に自然資源管理を学びに行くから、誰か代表を出してほしいって、ヘダールさん(*)からNGOアワム・グリーンに声がかかったんだ。トンブとマレナの村人も行くから、両方の村を知っていた僕が行くことになったんだ。

(*)ヘダールさん: 中スラウェシを拠点として、森林や土地に対する村人の権利を強める活動をしているNGO実践家・弁護士。

◆いつ頃から、トンブやマレナに関わるようになったの?

アワム・グリーンは、パル市の公立第三高校の自然愛好会のOBが作ったNGO。もともとみんな、山登りは好きだけど山村に興味があるってわけじゃあなかった。でも、山登りに行って、村の人の家に泊めてもらうことが多くて、そこでいろんな話を聞いた。村の土地が農園企業に奪われちゃったとか、国立公園に指定されて使えなくなったとか……。話を聞いているうちに、僕らにできることはないのかな、と考えはじめるようになった。村の人に相談を持ちかけられたことがきっかけで、村人の権利を守ったり、強める活動を手探りで始めた。1999年頃からはかな。

でも、法律的なことはよくわからないから、法律に詳しいヘダールさんに相談した。それが「いりあい交流」に関わることにつながっていったわけ。

◆福島、山形、滋賀の村々を訪ねて一番印象に残ったことは?

日本って先進技術ばかりの国だと思ってた。トヨタとか、ソニーとか……。日本に自然資源管理を学びに行くっていわれてもピンとこなかった。でも、来てみたら、インドネシアと共通することが多くて驚いた。もちろん、インドネシアと違って、村の隅々まで道はきれいだし、施設もずっと整っているけどね。

それに、いろんな「変わった人」に会うことができた。雑木山を守るために、お金を集めてみんなで山を買いとっちゃった今北さん(滋賀県高島市朽木在住)とか。石筵(福島県郡山市)では、ムラの人たちが今も自分たちで水を管理して、農業や暮らしを守ってた。

森を共同で利用して管理する、日本の「入会」は、中スラウェシの村人が「ファカ」「パンジュアカ」「スアタ」って呼んでいるものに似たものだった。日本でも入会の権利をめぐるっては、いろんな闘いがあったみたいだけど、インドネシアよりも村人の権利が尊重されていると思った。それが一番の印象。

◆トンプでの映像記録作業では何をしたの？

トンプの慣習を、映像と文章と絵で記録する活動で、僕は文章を担当した。トンプで2年間も何を記録するんだろうって初めは思ってたんだけど……。澤幡さん（映像カメラマン）や日本人と一緒に、村で記録作業をできたのがとてもよかった。日本人の間に、あ〜、そういう見方もあるんだ、って思うことが度々だった。「村の人は“自然資源管理”って言葉、使ってた？」って尋ねられたときも……。そうなんだ。自然を管理するって感覚じゃないんだ。僕ら外の人間の枠組みで理解するんじゃないくて、村の人は自然をどうみているのか、理解したいって思った。

トンプの人たちが使うカイリ・レド語を訳すのはほんとに大変だった。僕もカイリ・レド族なんだけどね（笑）。僕が普段使ってるカイリ語はすごく薄っぺらいものなんだって痛感したよ。インドネシア語では表せない言葉がほんとにたくさんある。アニトゥとか、トゥプとか。神って訳したら、どこかズレてしまう。トンプでの取り組みはまだ終わってない。でも、他の村でもやれたらいいな、と思うよ。

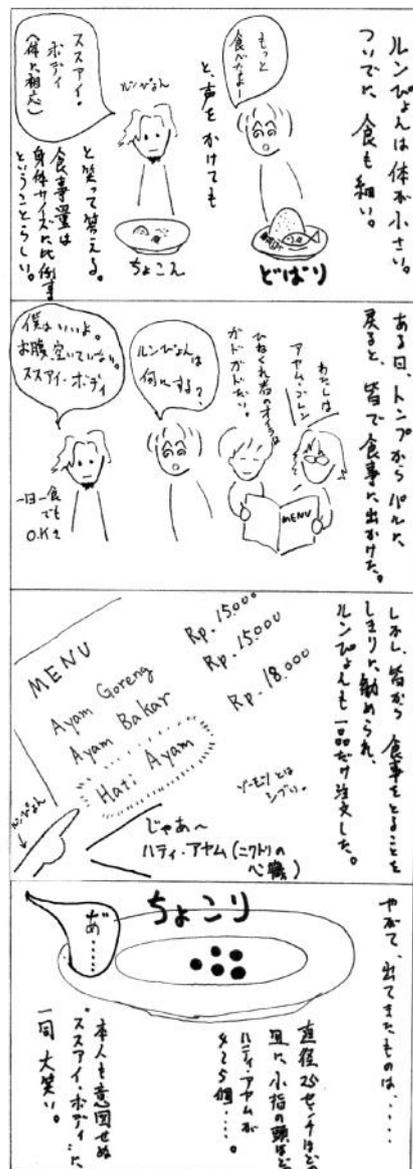
◆これからやっていきたいことは何？

NGOの活動だけでは世の中変わらないなあ、と思って、2009年の市議会選に出てみたけどあっさり落選！（笑）いい勉強になった。政治は僕にあってないことがよ〜くわかった。僕はこれからもNGOでやっていきたい。あ、大学に行きたい、と最近考えるようになったよ。高校出て10年。勉強なんてしてないけど、法社会学を勉強してみたい、って思ってる。社会や生態、文化を尊重する法律が必要だって思うんだよね。



クラウイ族の伝統衣装を着せてもらって、ちょっとオスマシ（2007年、マレナ村にて）。右端がルン。

ルンぴょんがゆく その1
食は万事の基本だぜの巻



カイリ語からインドネシア語への通訳を担当したルン。しばしば訳せず、固まってしまう……。 (岩井友子さんの漫画から)

インドネシアの言語事情

インドネシアは、文化・言語・慣習の異なる多様な民族からなる多民族国家。国の共通語はインドネシア語だが、民族の母語はそれぞれ異なる。カイリ族は中スラウェシ州のパル市周辺に住む民族。カイリ族の中にも、カイリ・レド、カイリ・エド、カイリ・タラ、カイリ・イジャなど、言葉・慣習が異なるグループがある。

「米飯」は、インドネシア語だと「ナシ(nasi)」。カイリ・レド語だと「カンデア(kandea)」。ぜんぜん違うでしょ！



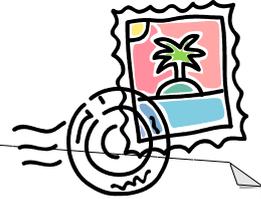
山形県中津川にて(2006年)

JICA研修員からのメッセージ

～日本で考えたコミュニティのこと、故郷のこと～

あいあいネットでは地域づくりに関わる人たち同士をつなぎ、学びあいのプロセスを促進するため、JICAの研修事業に協力しています、これまでに30カ国以上、約180名が来日し、研修を実施してきました。今回は2010年に研修に参加した皆さんの感想を、ご紹介したいと思います。

+++++



マイケルさん
(パプアニューギニア、
ウォセラ・ガウィ郡職員)

日本での最も興味深い学びの一つは、日本の地域コミュニティを訪れた事です。訪れたコミュニティは都会から遠く離れた場所にあつて、日本の近代的な社会とはそれほど接触なく、行政のサービスも行き届いてるとは言い難い所でした。彼らは、生活と生存の源である周囲の自然環境や文化、宗教に頼る、昔ながらの日本的な暮らしをしています。インタビューの席である一組の老夫婦が、「私達は何があつてもここに住み続け残っています。」と話してくれたのが、今でも印象に

日本では高齢化社会と人口減少は極めて重要な問題として認識され、若者たちは職や基本的な行政サービスを求めて都市部に移住していました。私は今回、高度に発展した国の、地域コミュニティの実情を経験させてもらいました。その国は今、コミュニティに再び焦点をあてるUターンアプローチを取り始めていました。このことはパプアニューギニアの社会にも何か大切な事を知らせてくれているように感じます。

私は今まで、コミュニティ開発には近代的な技術が必要だと勘違いしていました。しかしそうではなく、私達が持っている伝統や自然、知恵など、自分たちの原点が大切なのだと気がつきました。



私が日本で学んだこと、一つ目はコミュニティの課題のを見つけ方です。コミュニティの抱える課題を見つけるには、そのコミュニティの“事実”を分析する事が必要だと分かりました。私達外部者のコミュニティに対する勝手な思い込みをいくら分析しても、真の課題にたどりつけないのですね。また、コミュニティの事実を見つけるには、そこに住む人々との信頼関係づくりが不可欠だという事も分かりました。

それから二つ目として、外部者と地域の人々の役割は、地域づくりにとってどちらも等しく重要だという事に気づきました。

これから国に帰ってコミュニティで仕事をする時は、最初に必ず彼らと信頼関係を築くようにしたいと思います。まずは上司に話をして、担当する地域に1週間ホームステイをしてきたいと思います。また、コミュニティの事実を知るため、地域リーダーからの情報にだけ頼ることは決してしないようにします。



ウギエンさん
(ブータン、プナカ県職員)



研修では、コミュニティの人々が共同で行っている作業は何か、モロッコやアフガニスタン、パキスタンなどから来た他の参加者と一緒に書き出した事がありました。その時、世界中どこに住んでいようが、コミュニティの持つ機能は共通していて良く似ている事に気がつきました。

コミュニティは政府ができるずっと前から存在していて、外部者の手助けがなくても主体的に活動する力を持っているのですね。



アルトゥーロさん
(グアテマラ、NGO「Del Lago Association」職員)

事務局短信

事務所移転～里山と川の流に囲まれて

壽賀一仁（あいあいネット理事）

あいあいネットは2005年から新宿区高田馬場に事務所を構えてきましたが、この間地元で地域づくりに取り組む方々とのご縁が得られず、3度目の契約更新を前に移転を決意しました。この際都心を離れてみようとして場所探しをしたところ、在京メンバーの地元にも近い川崎市多摩区で良い物件にめぐり合い、4月末に事務所開きをいたしました。

新宿駅から小田急線急行で20分、多摩丘陵の緑と丹沢山地・富士山の遠景を眺めながら多摩川の鉄橋を渡るとまもなく向ヶ丘遊園駅に到着します。新事務所は駅から歩いて6分のマンション1階で、道に面したガラス張りの壁には活動紹介のパネルを展示するなど、近所の方への広報と声をかけていただきやすい雰囲気づくりに努めています。事務所の先には市民参加による保全活動が盛んな生田緑地が広がり、緑地の向こうにはあいあいネットも親しくさせていただいているさらさらプロダクション製作の映画『うつし世の静寂に』で舞台になったとんもり谷戸があります。一方、多摩川も散歩で行ける距離にあり、そこでは流域圏というつながりを意識しながら水辺の楽校をはじめとする様々な市民グループの活動がおこなわれています。

こうした環境の良さに加えて、この地域はまちづくりの取り組みも活発です。新事務所の物件は、毎年秋におこなわれる多摩区民祭というイベントで地元の方々に使われていたようで、下見の時“TAMA ALL STARS”というタイトルで壁一面に張られていた商店街の皆さんの写真には圧倒されました。また近くには専修、明治の2大学があり、その学生たちも様々なまちづくりの取り組みに参加しているようです。以前あいあいネットの勉強会に参加してくださった泉留維さん（専修大学経済学部）もNPOぐらす・かわさきの理事として、地域通貨「たま」を通じた活動などをされていらっしゃいます。

私たちは、このような里山と川の流に囲まれたまちづくりの地で「いりあい・よりあい・まなびあい」の活動の充実に努め、地域の方々とのご縁を深めていきたいと考えています。皆様も近くにお越しの際はぜひ気軽にお立ち寄りください。



市民の憩いの場、生田緑地

私のオススメ地域

「クブリ郡」 (ブルキナファソ国カディオゴ県)

日本から遠く離れたアフリカ大陸の西部にある小さな内陸国、それがブルキナファソです。3年前、JICAの青年海外協力隊として私が派遣されたのがこの国でした。皆さんはブルキナファソという国をご存知ですか？派遣が決定した時の私もそうでしたが、アフリカのイメージといえば「自然、野生動物、貧しい、治安が悪い」などか、もしくは「遠くてよくわからない」といった意見が多いのではないかと思います。

そんな私が2年間生活していたのが、カディオゴ県クブリ郡です。人口4万人ほどのクブリは首都ワガドゥグから北に30kmの距離に位置していますが、多くの家庭には電気や水道がありません。当然私が住んでいた家にも備わっておらず最初は苦労しましたが、3ヶ月を過ぎる頃にはそんな生活にも自然と慣れていました。

衣食住の西洋化と共に急速に発展する首都、そこからバスで30分の距離にはブルキナファソ人も自負する「昔から変わらない生活」が残っています。電気や水道など「ないもの」ばかりが目立つ反面、常に握手と挨拶を怠らず、日々お互いの田畑を手伝い合い、家族や友人に何かあれば文字通り飛んで駆けつける、国民性の一つに挙げられる“solidarité”（「相互扶助」の意）を常に重ん

じている彼らは、まさに現地語で「清廉潔白な民」という意味であるブルキナファソの国名そのものを表しています。また、その一方で、どんな状況であっても“Ca va aller”（「なんとかなる」の意）と言って片付けてしまう彼らからは、心の豊かさのようなものを感じます。

村の暮らしに誇りを持ち、自分たちを“Koubrian”（訳すならば「クブリ人」）と呼ぶユーモアも持つ彼ら。私たち日本人にとってはまだまだ遠いアフリカですが、そんな彼らの暮らしが少しずつでも日本で伝わっていけば…と私は思います。

高橋博（あいあいネット事務局）

※4月からスタッフになりました。よろしくお願ひします！

写真 トマトを収穫する人々(上) / クブリの市場(下)



お知らせ

☆ 生田緑地サマーミュージアムに出店します！(8月7日(日)11:00～18:00)

生田緑地の夏のイベントにあいあいネットも参加します。“自然と人間の共生を考える”というテーマのもと、パネル展示や日本とインドネシアの、里山の自然の恵みを活かした製品の展示販売を行います。ぜひ遊びに来て下さい。

☆ あいあいネットオープンDAYに、ぜひいらしてください

毎月第一土曜日の13:00～16:00まで、あいあいネットのオープンDAYとして事務所を開いています。あいあいネットの活動や、コミュニティ開発、地元学、ファンリテーションなどに関心のある方、お気軽に事務所へお立ち寄りください(事前にご連絡頂けると助かります)。

あいあいネットの仲間になりませんか？

私たちは、“社会が変わるヒントはコミュニティにある”と信じて、コミュニティが元気になるような活動を続けています。日本と世界の仲間たちとの、まなびあい、つながりあいの仲間になりませんか？

- ◆正会員(総会での議決権あり) … 10,000円/年額
 - ◆賛助会員(総会での議決権なし) … 5,000円/年額
 - ◆寄付 … どなたでも、いつでも、いくらでも
 - ◆ボランティア … イベント・事務局作業の手伝い、翻訳など
- ※ご入会の際は申込書が必要です。事務局までご連絡下さい。

2011年6月10日

発行：一般社団法人あいあいネット
〒214-0031神奈川県川崎市多摩区
東生田1-14-5アムールK2 102
Tel/Fax : 044-455-4508

発行者：和田信明

編集：高田尚子